

巻頭言

「留学生30万人計画」と農学系大学の将来展望

鈴木 昭憲

日本農学アカデミー会長・東京大学名誉教授

第169国会における施政方針演説において、福田首相は2025年頃を目途に受け入れ留学生数30万人をめざすこと表明した。昨年取りざたされた「留学生100万人計画」よりは、かなり穏やかな計画ではあるが、留学生を受け入れる大学・短期大学等における在 student 数がおよそ300万人とすると、その10パーセントを留学生がしめるという計画である。この方針に対しては、賛否様々な意見があると思われるが、社会がグローバル化、ボーダーレス化している今日、数字の当否は別として、わが国が国策として留学生受け入れの大幅増加を掲げたとすればいずれそれに近い状況が出現するであろう。1983年、当時の中曽根内閣が21世紀初頭にフランス並みに約10万人の留学生受け入れ政策を提言したが、当時の留学生数は約1万人であり、それに10倍する留学生の受け入れ実現に半信半疑の大学関係者が少なくなかった。ところが、2007年の留学生数は実に12万人弱となっており、数字の上では当時の計画が見事に実現したことになる。

さて、「留学生30万人計画」が国の政策として実行されると10数年後には、各大学の学生の10人に一人が外国人留学生というキャンパス風景が実現することになる。そのときには、農学系大学における教育の在り方もいまとはかなり異なったものに成らざるを得ないのではなかろうか。留学生を受け入れの意義は人材育成を通じた国際貢献ということは勿論であるが、留学生を通じて彼らの母国とわが国との相互理解、国際親善の増進に資するというのもあ

る。受入大学の立場からは、大学進学年齢の人口が急速に減少することを考えると、大学経営上からも留学生の獲得に力をいれるということもあろう。当然なことであるが、留学生の受け入れにおいて大切なことは人数増だけではない、どのような学生が留学を希望してくるかという事、そして彼らが留学によってどのような人材に成長していくかと言うことがより重大な問題である。大学にとって、留学生受け入れの本質的な意義は国外から優秀な人材を確保することにより、大学の教育研究環境を向上し国際的な競争力アップにつなげることである。そこには、国際基準にてらして遜色ないカリキュラムの構築、教育研究インフラの充実等、その教育環境の向上において取り組むべき多くの課題が横たわっていると思う。

ところで、我が農学系大学は、農学の広い分野の責任を担うにはその大部分は規模が小さく、先進国の一流大学と比較して残念ながら遜色があることを認めざるを得ない。ただ、わが国には優れた施設や人材を擁する国や地方の試験研究機関が多数存在する。留学生受け入れにおいても、これら試験研究機関と大学との有機的な連携が望まれる。ここは、全国の農学系大学関係者、研究所関係者等が協力し英知をあつめて、世界に誇りうる教育研究環境を作り上げていかなければならない。留学生受け入れが数の増大にのみとらわれて、受け入れる大学や周囲の熱意と、それらの環境整備がおろそかであれば、折角の留学生が留学後にわが国の良き理解者に成長することなど期待できない。諸外国の優秀な若者が、競って留学を希望する農学系大学をつくりあげ、充実した留学生生活を提供したいものである。

世界の食糧問題、自然環境問題等の農学にかかわる地球規模課題を担う有為の人材を育成するにふさわしい特色有る優れた教育研究環境をつくりあげ、そこに自国学生のみでなく世界から優秀な学生が集う、これはわが農学系大学改革の理想であろう。「留学生30万人計画」は、農学系大学の将来展望において、視野を世界に広げて論ずる機会を与えてくれているように思う。本アカデミー会員各位におかれても、この機会に、それぞれの立場において農学系大学の教育研究における将来について議論を深めていただきたいと願う次第である。